

Title	『太平記』長恨歌説話の絵画展開：永青文庫本と諸本比較
Sub Title	The pictorial development of Chōgonka in the Taiheiki : a comparison of the Eisei bunko collection with other versions
Author	宋, 春曉(Song, Chunxiao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2024
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.127, (2024. 12) ,p.28 (203)- 42 (189)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01270001-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『太平記』長恨歌説話の絵画展開——永青文庫本と諸本比較——

宋 春曉

はじめに

室町時代に成立した長編軍記物語『太平記』は、長い年月をかけて人々に親しまれ、中世から近世にかけて様々な形で享受されてきた。特に絵巻化については、その初期の制作過程は明らかではないものの、物語の広がりや合戦絵巻制作の風潮から考えて、室町時代以降早い時期に複数の絵巻が制作されたと考えられる。¹ 現存する最古の『太平記絵巻』は、伝海北友雪画の十七世紀の全一二巻作品とされている。² このように『太平記』の一部分を絵巻にした例は見られるほか、その部分内容に取材して、『異域物語』のような別の主題の絵入り本が制作される例もあるが、長編物語であるためか、『太平記』全巻を絵巻や絵本に仕立てたものは極めて稀であり、現時点で、寛文・延宝頃写の永青文庫蔵『絵入太平記』⁴ がその唯一の例として知られている。

全八十三冊という奈良絵本としては最大規模を誇るこの作品は、寛文頃平仮名絵入り整版本（九州大学広瀬文庫蔵）⁵ の本文を基に制作され、挿絵も一部は整版本を参考にしたが、金泥を用いた新たな独自図様で構成されることが多い。⁶ 近年、

『奈良絵本『太平記』の世界―永青文庫所蔵『絵入太平記』全挿絵影印ならびに研究』⁷において、永青文庫所蔵『絵入太平記』の挿絵がすべて影印され、詳細な解説が行われ、独自に描き出された部分にこそが、人々が『太平記』をどのように受け止め、解釈してきたかを如実に示しているという重要な指摘がなされている。今後は、整版本との挿絵比較をさらに深めるとともに、「他の絵画化作品とどのような関係にあるのか」、「『長恨歌』など『太平記』にも類話が含まれる諸作品の奈良絵本・絵巻類などを視野に入れた検討が必要であろう」など、より広範な視点からの研究が求められる。

本稿では、近年注目されている『太平記』永青文庫本を中心に、これまで十分に研究されてこなかった長恨歌説話の絵画化の様相を、他の関連作品との比較検討を通して、その特徴と手法を明らかにしてみたい。

一 楊貴妃について

『太平記』「畠山入道謀反の事付楊国忠が事」における長恨歌説話は、玄宗皇帝の楊貴妃への溺愛と、安史の乱を引き起こした楊国忠・安祿山の横暴を重ね合わせ、当時の関東で権勢を誇った畠山国清を批判的に描く。特に結末部は、玄宗と貴妃の関係を「罪深い契り」と断じ、安史の乱を「功に誇り人を猜みし故」に起きたと論じ、現在の関東における合戦も、過去の乱と同様の構図であると指摘する。このことから、『長恨歌』が単なる悲恋物語としてではなく、権力者の驕慢とその破滅を戒める教訓的な物語として捉えられている点が特徴的であり、このような勸戒的な受容は、『太平記』に限らず、『平治物語』に見られる信西が後白河院に贈った「長恨歌図」や、五山詩の一部にも共通しており、永青文庫本が成立する以前の時代において、広く共有されていたと考えられる。

この話に対し、永青文庫本巻七四は、整版本巻三七のこの本文を踏まえつつ、挿絵において独自の表現を見せている。畠山国清を描いた図①を除く、②から⑨までの八図は、長恨歌説話を視覚的に展開するが、紙面の都合上、『奈良絵本『太平記』の世界』(第三三二頁～三三五頁)に収録されているカラー図版②～⑨を参照されたい。各図は、②唐玄宗が楊貴妃を寵愛する、③楊国忠が味方の首を吐蕃の首と称して都へ帰還する、④潼関の山から攻める安祿山に敗れて哥舒翰は河に追

落とされる、⑤玄宗が馬嵬で官軍に道を塞がれて楊国忠・楊貴妃の引き渡しを要求される、⑥唐軍は玄宗の子肅宗を皇帝とし安祿山軍と戦う、⑦玄宗が長安への帰還中に馬嵬の地で嘆き悲しむ、⑧方士楊通幽が蓬萊宮を訪ねる、⑨方士が蓬萊宮で楊貴妃にあう、といった物語の主要場面を、順を追って描出している。

整版本では、この部分に計一八図¹⁰が描かれ、うち、③から⑬までの一六図が長恨歌説話を展開している（図一）。物語の展開により、永青文庫本の場面と対応させると、それぞれ、「一 楊貴妃への寵愛」③④⑤②、「二 楊国忠の無道と安祿山の挙兵」⑥⑦⑧③④、「三 馬嵬の事変」⑨⑩⑪⑤⑥、「四 貴妃を失った玄宗の悲しみ」⑫⑬⑭⑦、「五 蓬萊宮を尋ねる方士」⑮⑯⑰⑱⑧⑨となっている。整版本は各事件に対して複数の挿絵を配し、物語の経過を詳細に描いているのに対し、永青文庫本は代表的な場面を一図か二図で表現している点が特徴的である。

例えば、「一 楊貴妃への寵愛」において、整版本は、唐玄宗の頃、楊貴妃という美人がいたので③、それを奪い④、日々離さず寵愛し、その兄の楊国忠を大臣に命じた⑤という一連の経過の中で楊貴妃を造形する。特に注目すべきは、玄宗と貴妃が共に描かれている図が、全一六図という多くの図版の中でも、楊国忠を任命する図⑤のみである点である。このことから、整版本の挿絵は、玄宗と貴妃の恋愛関係そのものよりも、むしろ、その寵愛が招いた政治的な混乱、すなわち楊国忠の権勢と安史の乱への道筋を強調していることがわかる。

一方、永青文庫本は、「二 楊貴妃への寵愛」に対し、玄宗と楊貴妃の酒宴の場面を単独で図②に描き出している。本文で強調されている「昼は終日に輦を共にして南内の花に酔いを勧め、夜はよもすがら席を同して、西宮の月に宴をなし給ふ」という、二人の深まる愛情と華やかな遊宴の様子が、この図に凝縮されている。特に、夜間の宴の様子は、空の満月、庭園の池と緑、そして宮殿内での音楽演奏など、一枚の絵画ながら、細やかな描写によって豪華絢爛に表現されており、貴妃が金の釵をつけ、赤い装束を身にまといて玄宗と並んで座る姿は、その恩愛関係を象徴的に表しているといえる。

両書の相違は、「三 馬嵬の変」の描写においても顕著に表れる。蜀に向かう途中の馬嵬坡で、軍勢が足止めを食らい、楊国忠と楊貴妃が殺害された後、ようやく軍勢が前進し、安祿山との戦へと展開するという物語の流れである。

整版本における馬鬼の場面(図⑨⑩⑪)に関しては、二人が乗る乗り物として駱駝が描かれている点が注目に値する。駱駝は、日本においては中国の本草学の文献¹¹⁾などを介して知られていた動物であり、『長恨歌』という異国物語への駱駝の登場は、こうした知識背景と無関係ではないだろう。江戸時代に入ると、オランダを通じて駱駝が日本に渡来し、將軍家光への献上もなされるなど、舶来の珍獣として注目を集めたと同時に、権力者の所有物としてのイメージも定着しつつあった。

図⑨における玄宗が駱駝に乗るといふ表現は、こうした時代の風潮を反映し、読者の興味を引くための演出であった可能性がある。また、続く図⑩、⑪は、楊国忠と楊貴妃の悲劇的な最期を、本文通りに克明に描写している点も特徴的であり、楊国忠が矛で刺され、楊貴妃が轅の下に引きずり込まれるという衝撃的な場面は、読者の好奇心を刺激し、作品の人気の一因にもなったと考えられる。こうした駱駝表現と楊国忠処刑の描写は、元禄一一年刊『太平記』巻三七第三図などの流布刊本にも見られることから、『太平記』が広く読まれた背景には、このような読者の関心があつたことも新たにうかがえる。

次に、永青文庫本における「三 馬鬼の事変」の描写(図⑤⑥)を見てみよう。図⑤では、整版本のように玄宗と貴妃の姿を隠すのではなく、馬車の中から玄宗皇帝と金釵を挿した楊貴妃の姿が鮮やかに描き出されている。また、楊国忠と楊貴妃の処刑場面は一切描かれず、安祿山との対峙と合戦(図⑥)に焦点を当てている点が特徴的である。この合戦場面は、同文庫本に見られる他の場面、例えば巻七七第二図の芳賀高貞・高家勢と足利基氏勢の対陣、巻五一第三図の高師直勢と楠正行勢の四條畷での戦いなど、両軍が対峙する典型的な構図を踏襲している。

一方、永青文庫本において、馬鬼の変以降、貴妃の姿が再び現れるのは、巻七四の最終図、すなわち蓬萊宮の場面(図⑨)である。彩雲がたなびき、棕櫚や松が茂る仙境の宮殿には、仙女たちが群がり、その中央に金色の髪飾りをつけ、長い帯を身にまとった貴妃が描かれ、蓬萊宮における貴妃の尊い身分が強調されている。貴妃は足を踏み出して、階段の下に跪く方士を迎える様子が表現される。これに対して、整版本では、仙境の描写は簡略化され、方士の到来(⑬)、侍女との交流(⑭)、貴妃からの簪の渡し(⑮⑯)といった物語の進行に重点が置かれている。

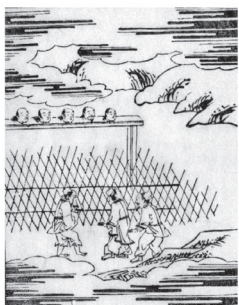
以上、『太平記』永青文庫本と整版本を対照させながら、楊貴妃の描かれ方を中心に関係場面を考察してきた。整版本挿



4



3



7



6



5



10



9



8

絵が、読者の興味を引くための物語の連続性を重視し、猟奇的な好奇心にも迎合しようとする傾向があるのに対して、永青文庫本は整版本の本文を継承しつつも、挿絵は玄宗との深い愛情関係を持つ高貴な女性としての楊貴妃像を理想化して描く傾向にある。特に、玄宗と貴妃の並んだ姿を増やし、貴妃の死を回避し、最後に仙女たちに囲まれる姿を描くなど、その傾向は顕著である。このことは、広く流通する版本と、特定の経済力を持つ層に向けて制作された絵入り写本の性格の違いを反映していると考えられる。



11



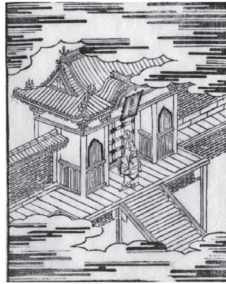
12



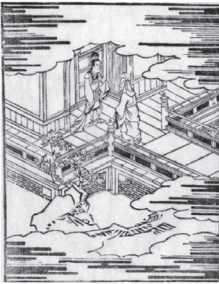
13



14



15



16



17



18

次に、『太平記』を主題としない他の『長恨歌』奈良絵本・絵巻との比較を通じて、永青文庫本の表現の特徴をさらに深掘りしたい。

二 楊国忠について

『長恨歌』奈良絵本・絵巻は、大きく四つの系統に分類できるが、そのうち第三系統の上巻においては、『太平記』流布本からの引用があったことを、拙稿¹³において指摘した。この系統は、永青文庫本のように本文全体を写しつつ、挿絵で楊貴妃の貴人としての形象を強調する手法ではなく、『太平記』巻三七「畠山入道謀反の事付楊国忠が事」

や卷三五「玄宗寧王夫人を奪ふ事」から、「紅顏翠黛」や「銀漢万里的月」といった表現を抄出し、楊貴妃の美貌を華麗な言葉で描き出しているのである。

同時に、この系統は、楊国忠が味方の首を吐蕃の首と偽って都へ帰還する場面を、本文だけでなく挿絵にも詳細に描写している点が特徴的である。以下に、第三系統における該当箇所を抜粋し、挿絵と対応する部分を下線で示す（波線は『長恨歌』挿絵、傍線は『太平記』挿絵を示す）。

さる程に、兵疲れ、将怠り、進む勢なかりければ、吐蕃の戎狄ども、逆寄せにぞ寄せたりける。大将はもとより臆病なり。士卒の心を一にせざれば、一戦も戦わず。a我先にと、逃げける程に、大荒の四万七千余里、吐蕃に従ひ靡きけり。楊国忠、たまり得ずして、都を指して上りけるが、さもあれ、今度、大将を申し請けまかり向かふたる甲斐もなく、一戦もせで帰りなん事、上聞、その憚りありければ、味方の中に疲れたる兵、C一万人が首を刎ねて、各々太刀の切先に貫き、これ皆、吐蕃の徒の首なりと号して、奏しければ、即ち、D首どもをば、獄門の木に掛けられ、大荒の地をば、楊国忠にぞ賜りける……禄山が兵、廿万騎、都を指して攻め上る時に、哥舒翰、兵八万を率し靈宝といふ所に支へて、b禄山が右將軍、崔乾祐と戦ふ。（『長恨歌』ライデン本）¹⁴

『長恨歌』第三系統（図二）において、九曜文庫藏絵巻は、楊国忠が戦場から逃走する場面を視覚的に表現している（波線部a）。同系統のライデン本は、楊国忠の無道な行為を直接描写せず、哥舒翰と安禄山の対陣場面に移行している（波線部b）。このように、玄宗と貴妃の悲恋物語を主題とする『長恨歌』奈良絵本・絵巻は、軍記物語の本文を引用しつつも、挿絵においては斬首などの残酷な描写を回避する傾向が見られるのである。¹⁶

対して、『太平記』絵入整版本（図7）では、楊国忠の首が獄門に晒される様子（傍線部D）が描かれる一方、永青文庫本（図3）では、楊国忠の軍勢が味方の首を貫いて都に帰還する場面が描かれる（傍線部C）。後者の斬首表現は、この説

【図二】『長恨歌』 奈良絵本（九曜文庫蔵本とライデン本）



話に限らず、巻五六の項羽が垓下の戦いで漢の大將軍三人の首を取って矢先に貫く場面や、巻六九の南朝方の定仏が將軍方の湯川庄司勢の首をさらす場面などに見られ、同書において慣用的に用いられている表現手法といえる。

以上、楊国忠に関する場面を中心に、『太平記』と『長恨歌』の挿絵を比較してきた。その結果、『太平記』永青文庫本は奈良絵本の体裁でありながら、そこに描かれた長恨歌説話は、『長恨歌』を主題とする奈良絵本には見られない斬首や梟首といった表現を慣用的に用い、軍記物語としての特徴を顕著に示していることが明らかになった。

次に、永青文庫本の最後の場面である蓬萊仙境に着目し、同書に

特有の表現手法についてさらに考察を進めたい。

三 蓬萊仙境について

長恨歌説話の後半は、方士が蓬萊の仙境を訪れ、玄宗の消息をもたらし、貴妃から釵を渡される物語展開である。特に、貴妃が方士に釵を渡す場面は、『太平記』の複数の諸本や、『長恨歌』『蓬萊物語』など他の絵入り作品にも共通して見られ、長恨歌説話を視覚的に表現する上で欠かせない典型的な場面といえる。

この場面では、貴妃が必ず母屋に描かれるという定型化が見られる。これは、母屋の位置が權威の象徴であり、登場人物の身分を視覚的に表現する上で重要な要素であったことを示している。例えば、『源氏物語絵巻』『鈴虫¹⁷』に見られるように、母屋との距離や廂の位置は、人物の身分秩序を表現する伝統的な絵画手法であった。特に、蓬萊仙境の場面において、母屋に描かれる貴妃は、他の登場人物よりも高い地位にあることを明確に示している。しかし、方士の配置については、諸本によって差異が見られ、例えば、『太平記』整版本では「方士、手を揖して金闕の玉の廂に跪く」と記述されているが、諸本の挿絵では方士の位置が異なっており、それを系統に示すと、以下の通りになる（各系統の代表的な図様は【図三】参照）。

〔系統一〕 方士が貴妃の母屋にいる

『長恨歌』奈良絵本・絵巻（大谷女子大学蔵本、聖徳大学蔵本、国文学研究資料館蔵本）、浅井了意『やうきひ物語』。

〔系統二〕 方士が廂の間にいる

『長恨歌』奈良絵本・絵巻（三の丸尚蔵館蔵本、九曜文庫蔵本（小型絵巻）、九曜文庫蔵本、ライデン国立民族学博物館蔵本、立教大学蔵本）、狩野山雪「長恨歌画巻」、狩野永納『長恨歌図抄』、『太平記』寛文頃整版本。

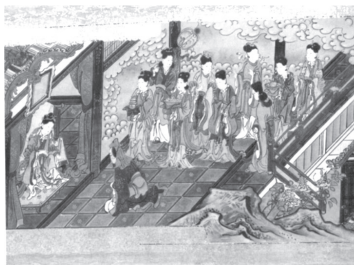
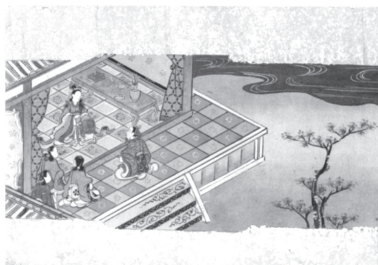
【図三】「系統一」

『長恨歌絵巻』（右）と『やうきひ物語』（左）
（国文学研究資料館蔵）



「系統二」

『長恨歌』九曜文庫小型絵巻
（右）・九曜文庫蔵絵巻（左）



「系統三」 方士が階段のほうにいる」

『蓬萊物語』奈良絵本・絵巻（プロシャ文化財財団国立図書館蔵本、九曜文庫蔵本、石川透蔵本）、¹⁸

『太平記』永青文庫本。

「系統四 その他」

清原雪信画「楊貴妃図」²⁰等。

系統一と系統二では、方士が母屋内または母屋に近い廂に描かれ、権威に近い存在として位置づけられる。これらの系統には、『長恨歌』を主題とする作品が多く含まれる。一方、系統三では、方士が貴妃から最も離れた階段のほうに描かれるなど、やや距離を置いた配置となっている。この系統には、『長恨歌』以外の作品が多く含まれる。系統四は、野外など、その他の描写を指す。

永青文庫本の図⑨は、系統三に分類される。同系統の作品には、『長恨歌』よりもむしろ、『蓬萊物語』の一部伝本との共通性が見られる。



『蓬萊物語』は、蓬萊山と不老不死の薬を主題とする物語であり、玄宗と楊貴妃の物語においても、楊貴妃は実は蓬萊宮の仙人であり、霓裳羽衣は神仙より伝わった舞楽であるという側面を強調している。【図三】に示される系統三の場面では、貴妃が母屋に「座り」、侍女が庇に「立ち」、方士が階段のほうに「跪く」という構図が特徴的である。この遠近法と姿勢の対比によって、方士という存在が、尊い仙人との身分の相違が明らかに表出されている。

なお、永青文庫本と『蓬萊物語』の相似性は、方士が蓬萊宮に辿り着く図²¹にも見られる。図⑧では、本文の「一

の亀尾を戴けり。中に五城峙ちて、十二の楼閣あり。其宮門に金字の額あり」という記述に基づき、彩雲を背景に、大きな亀が蓬萊山を背負う様子が描かれている。亀に蓬萊山を載せる表現は、古くから中国においてはもちろん、日本においても幸運と長寿の象徴として用いられ、『年中行事絵巻』²²などにも図様が見られるが、一七世紀に制作の黄金期を迎えた奈良絵本・絵巻の類においては、特に『蓬萊物語』の挿絵において頻繁に採用された。代表的な例は、京都大学文学部美術史学研究室所蔵本や、スเปนサーコレクション蔵本などがある。これは、亀に蓬萊山を載せる図様自体が、蓬萊山の仙境としての性質を強調するものであり、『蓬萊物語』の物語世界と深く結びついているためと考えられる。一方、『長恨歌』は、玄宗と楊貴妃の悲劇的な恋物語であり、現世と来世の恋愛関係を主題としているためか、『長恨歌』を主題とする奈良絵本・絵巻では、亀に蓬萊山を載せる図様はあまり見られない。

以上の考察から、『太平記』永青文庫本は、蓬萊亀を表現し、貴妃と方士の遠近関係と姿勢対比を工夫することで、蓬萊仙界の理想境と楊貴妃の仙人としてのイメージをより鮮やかに描き出していることがわかる。この特徴は、『蓬萊物語』に見られる図様との共通性を示し、永青文庫本が、一種の理想的な世界を示す祝儀物としての側面を持っていることを裏付けている。

むすび

本稿では、『太平記』永青文庫本を中心に、これまで十分に研究されてこなかった長恨歌説話の絵画化の様相を、『太平記』『長恨歌』『蓬萊物語』など他の絵入り本作品との比較検討を通して、その特徴と手法を検討してきた。

『太平記』の長恨歌説話は、本文において教訓的な側面が強調される一方、絵画化される過程で異なる性格を見せている。永青文庫本は、整版本本文を継承しつつも、挿絵では、物語の連続性を重視し読者の猟奇的な好奇心にも迎合しようとする整版本の性格とも異なり、理想世界を示す祝儀性があることが明らかになった。具体的には、絵画場面では、軍記物語に見られる合戦や斬首といった慣用表現を用いる一方で、長恨歌説話の前半部分では、貴妃の処刑を回避し、玄宗との恋愛関係

を強調する描写が見られ、後半部分では、蓬萊亀の図様や、貴妃と方士の遠近関係など、『蓬萊物語』との共通性を見せることで、楊貴妃を貴人から仙人へと昇華させ、物語全体をめたい祝儀物へと変容させていることがうかがえる。

この分析から、永青文庫本は、中世軍記物語が新たな変容を遂げる具体相を考える上では、見過ごせない重要な一例であることがわかるが、今後、このような手法が、他の『太平記』の章段や、さらには他の軍記物語にも見られるのかどうかについては、更なる研究が求められるのであろう。

〔付記〕貴重な資料の利用を許可くださった諸機関に感謝申し上げます。なお、本稿は、二〇二二年度教育部人文社会科学重点研究基地重大项目「東方文学與文明互鑑…多語種古代東方文学插图文本比較研究」(22JJD75002)による研究の一部であり、また日本学術振興会外国人特別研究員プログラムによる成果である。

注

1 真保亨「太平記絵巻」(埼玉県立博物館編『図録太平記絵巻』埼玉新聞社、一九九四年)。

2 一二巻について、第一・二・六・七・十巻が埼玉県立歴史と民俗の博物館、第七・十一・十二巻が国立歴史民俗博物館、第三・八巻がニューヨーク・パブリック・ライブラリーに所蔵され、第四・九巻は所在が確認されないものの、白描模本がボストン美術館(三巻本)と東京国立博物館(二巻本)にあり、概要を知ることができる。また、筆者について、「太平記絵巻」を中心とする筆者は、十巻以上の豪華絵巻の本文を担当することからしても、相当な力量の持ち主と考えられる」という(石川透「奈良絵本・絵巻の研究と収集(八) 太平記絵巻の筆者について」『日本古書通信』八五、二〇二〇年)。同「軍記物語とその絵画化」(『軍記物語講座』三巻、二〇一九年)。

3 小林健二「『太平記』を題材とした絵巻・絵本―スパンサーコレクション蔵『呉越物語』を中心に―」(『説話文学研究』四六、

二〇一一年)。

公益財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託。〔寛文・延宝〕写。〔朝倉重賢〕筆。綴葉装八三帖。縦二三・七厘、横一七・二厘。紺色地金襴緞子表紙。金泥植物下絵入鳥の子紙。平仮名漢字交じり、挿絵前葉より散らし書き。

九州大学附属図書館広瀬文庫蔵。〔寛文〕刊。四一冊。縦二九・二厘、横二〇・六厘。表紙金泥菖蒲模様あり。平仮名交じり文、挿図〔墨印〕あり。九州大学附属図書館貴重資料目録データベースの解説による。

石川透「太平記絵巻・絵本の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、二〇〇三年、三五八頁〜三六四頁)。

中根千絵 森田貴之『奈良絵本『太平記』の世界―永青文庫所蔵『絵入太平記』全挿絵影印ならびに研究―』(勉誠出版、二〇二二年)。

岩山泰三「五山詩における楊貴妃像―題画詩と『後素集』―」(『国文学研究』一三二、二〇〇〇年)、鷲頭桂「玄宗皇帝絵にみる勸戒性・長恨歌絵を中心に」(『アジア遊学』二七一、二〇二二年)などに詳しい。

中根千絵 森田貴之『奈良絵本『太平記』の世界―永青文庫所蔵『絵入太平記』全挿絵影印ならびに研究―』(勉誠出版、二〇二二年)。

刊本第⑪の挿絵は、別の巻に差し込まれているが、森田貴之氏の推定により錯簡と考えられ、長恨歌説話を描く場面として数えた(前掲注中根千絵・森田貴之編著の研究篇による、一六九頁)。

『本草綱目』などに薬用の効果が記される。駱駝の日中文学史などについては、杉田英明「駱駝と日本人―動物表象を通して見た異国趣味―」(『比較文学研究』八六、東大比較文学会、二〇〇五年)に詳しい。

その第一回は、正保三(一六四六)年二月から翌年三月にかけて、オランダ商館長ウィルヘルム・フェルスターヘン(Willem Verschell)が江戸参府を行なった際に將軍家光に献上した駱駝二頭であった。一六四七年一月六日(正保三年十二月一日)に、「予の後方の青い小石の所にはらくだが二頭黒びろうとで被われて立っていた。予は前の位置から一歩進んで陛下に敬するよう命ぜられた」などが記録されている。『長崎オランダ商館の日記』第二輯(岩波書店、一九五七年、一二九〜一三〇頁、一三三〜一三四頁、一三八頁など)。

宋春暁「奈良絵本『長恨歌』の成立―ライデン国立民族学博物館蔵本を中心に―」(『中世文学』六九号、二〇二四年)

ライデン国立民族学博物館蔵本 (Nationaal Museum van Wereldculturen Collection, Collection Ph.F.B. von Siebold, Inventory no: RV-1-4353)

九曜文庫蔵。(貞享・元禄)写。小型絵巻。縦一七・一厘。牡丹唐草金欄表紙。鳥の子紙。金銀切箔雲母引き、天地に金泥塗り。上巻六図、中巻五図、下巻五図、計一六図。(中野幸一編『奈良絵本絵巻集九(長恨歌・武家繁昌・藤袋の草子)』早稲田大学出版部、一九八八年)。

軍記の内容を手彩色の絵入り作品に仕立てる際に、残虐描写の回避が行われることは、滝澤みか「馬の博物館蔵画帖にみる『保元物語』『平治物語』の二段階の享受と構成」(前掲中根千絵・薄田大輔編著)、石川透・星瑞穂「舞の本をよむ 武将が愛した舞の世界の物語 海の見える杜美術館」(三弥井書店、二〇一四年)、糸汐里「中近世語り物文芸の研究―信仰・絵画・地域伝承―」(三弥井書店、二〇二三年)等にも指摘が見られる。

三谷邦明『源氏物語絵巻の謎を読み解く』(角川書店、一九九八年)

エヴァ・クラフトほか編著『お伽草子絵巻集と研究―西ベルリン本 未刊国文資料第四期第十冊―』(未刊国文資料刊行会、一九八一年)。方士が庇と階段の接続部に描かれる。また上巻の別の場面にも、蛤から吹き出された雲の中に蓬萊宮が表現される。

中野幸一『奈良絵本絵巻集 別巻三(花鳥風月・蓬萊絵巻・文正の草子・福富草子)』(早稲田大学出版部、一九八九年、一七二頁)より転載。

ボストン美術館蔵。 <https://collections.mfa.org/objects/24919>

図版は、前掲中根千絵・森田貴之編著、三三五頁参照。

巻一二に祇園御霊会の神幸当日の雑色を描く際、笠の上には、亀の背に巖を載せる蓬萊山の作り物が見られる。

『京都大学蔵むろまちものがたり』六(臨川書店、二〇〇一年、三七三頁)